

## Y2-17

救護員としての赤十字看護師研修を実施して

日本赤十字社岩手県支部

○阿部 幸子、長谷川 信之、木村 匠

A県では、新任看護師研修5日目に「救護員としての赤十字看護師研修」を実施している。内容は、赤十字の発祥と歴史・赤十字の現状と課題・国際人道法の講義である。今年度から研修を担当する事となり、この研修が、救護員養成だけでなく、赤十字病院の職員としての意識付けに重要であることがわかった。今後、より効果的な研修を運営する上で、今回の研修を受講者アンケートから振り返りたい。受講者は、赤十字以外の卒業生で、過去にJRC等で赤十字についての講義を聞いた事がある受講者は1名のみであった。受講前の赤十字へのイメージを尋ねたところ、「災害時医療」「献血」「海外支援」という回答であった。が、赤十字と病院の関わりを理解していた受講者は少なく、赤十字の病院に就職したという意識は薄かったようである。しかし、受講後の感想には、「B赤十字病院の看護師というだけでなく、国際的組織の一員となった責任と誇りを持ちたい」「赤十字の一員としての自覚を持ちたい」等があった。これらのアンケート結果から、新任看護師が、赤十字の理解が不足したまま入職している事、初めて赤十字について触れる機会が、新任研修5日目の当該研修であるという事が確認出来た。赤十字看護師として病院に勤務する上で、赤十字についての知識や理解が不足している、患者の期待（赤十字病院だからという期待度）に気づかずケアを提供するという事にもなりかねない。また、後年、救護要請があって出動する際にも、心の準備がされていないという事になってしまう。故に、支部として今後研修を運営していく上で、研修の時期や時間的な問題、また、身近な先輩スタッフから折に触れ学べる機会を作るためにも、新任以外の研修会の実施等も検討していく必要がある。

## Y2-19

物品管理部滅菌係における人材教育

北見赤十字病院 物品管理部滅菌係

○森 正史、松原 廣和、富樫 清英

【目的】当部署では手術室をはじめ全外来、病棟の使用済器材の洗浄から滅菌までの再生処理を中央で一元管理を行っているが、作業員一人一人のモチベーションを向上させることと安定した品質を維持する為にQMS(クオリティマネジメントシステム)を構築し一貫した人材教育指導を実施している。指導者には日本医療器械学会認定の第1種滅菌技師を中心として段階的、階層別教育を行う。

【方法】この部門に配属される人は未経験者で中途採用者が多い現状で手術器械を実際に見るのも滅菌という言葉も初めてである。新人教育カリキュラムは大きく病院組織、器具器材の用途、洗浄基礎、組立検査包装、滅菌基礎、保管と払い出しの6項目としている。それぞれの習得期間は異なるが全ての項目習得時には認定試験(筆記及び実技)を実施する。合格点に満たない者は再教育を施し再試験に臨ませる。更には年次試験の実施や感染管理教育も併せて実施している。各学会、研究会にも積極的に参加させ、復命報告で改善テーマを与え各々に業務改善(QC活動)をさせている。

【結果】このような段階的教育により最終的には洗浄滅菌のプロを目標とさせている。多くの施設は作業マニュアル等はその責任者が作成して遵守させていると思うが、当部署では各作業員にマニュアル作成を任せ、その内容の審査、承認を責任者が行っている。これにより作業員間に責任が生まれ、業務内容が日々進化している現状である。

【結論】教育する側もされる側も日々勉強であり、我々は賃金を頂いて働いている訳でそれ以上の効果を経営側に証明しなければならぬ。何より診察や手術を受ける立場になり日々業務に当たっている。作業員のレベルが向上するにつれ現場のPDCAが常に活性している。また、結果的には病院全体の底上げに寄与していると考えている。

## Y2-18

国際赤十字で活動できる看護師を志して～初めての派遣経験から～

名古屋第二赤十字病院 国際医療救援部

○平田 巴雅、芳原 みなみ、伊藤 明子、赤塚 あさ子、杉本 憲治、片岡 笑美子、石川 清

演者は、国際活動のできる看護師になることを目標に、2002年日本赤十字九州国際看護大学に第2回生として入学した。在学中には、看護・人間・環境・健康そして国際を柱とした教育を受け、赤十字の基本原則である人道に基づき、国や文化を超え看護活動を行うための基礎を学んだ。そして、2006年には、日本赤十字社における国際医療救援拠点病院である名古屋第二赤十字病院へ入職し、3年間の病棟での勤務後、当院の国際医療救援部付け看護師として現在に至る。2010年1月12日ハイチ共和国でマグニチュード7.0の大地震が発生し、日本赤十字社(以下、日赤)は、国際赤十字赤新月社連盟の要請を受けて、基礎保健ERU(緊急対応ユニット)の派遣を決定し1月16日より現地での活動を開始しているが、演者は、その第3班の要員として5週間活動する機会を得た。現地では、日赤が運営しているクリニックで活動し、現地看護師業務のサポート、現地スタッフの勤務の管理やクリニック運営のサポート、医療資機材や薬品の管理、巡回診療のための調査と診療開始のための準備などを行った。初めての国際医療救援の派遣を経験し、国際赤十字の現場で求められる看護実践能力・コミュニケーション能力・マネージメント能力等を実感することができた。この経験から明らかになった、演者が国際赤十字で活動できる看護師となるために受けてきた教育や研修の成果と今後の課題について報告する。

## Y2-20

職員の意識啓発にむけて 私たちの試み

安曇野赤十字病院 教育研修推進室<sup>1)</sup>、看護部<sup>2)</sup>、経営企画課<sup>3)</sup>

○中野 武<sup>1)</sup>、宮田 みゆき<sup>2)</sup>、小西 育子<sup>2)</sup>、三浦 裕之<sup>3)</sup>

私たちの病院では念願の新築移転が完成し、新しい病院で業務が開始された。これまでも職員の医療人としての意識啓発に取り組んで来ているが、特に今回は新病院オープンにむけて接遇の一層の向上を目指し、これをテーマとした。これまで接遇向上の活動はサービス委員会を中心に為されてきたが、今回は教育研修推進室も加わりスタッフへの意識向上、意識啓発のための研修会を企画した。グループワークを主体とした研修会で、成人教育で使用されるワークショップの手法を用いた。一つのグループ7名を基本として、年齢や職域が混ざり合うように編成した。まず初めに従来経験した接遇の光景について各自語り合い、グループ内でその光景について共有。全体発表では、全員の前で参加者分の様々な接遇にまつわる物語がかけられる。この場で好ましい接遇とは何かについて意識の共有化が図られる。次のステップとして、各グループで新病院オープンに向けて、どのような病院を目指すのかが語られ、図式化され全体発表が行われる。朝始まり正午に終わる半日のプログラムである。ワークショップという全員参加型の方法の導入で、短い時間であるが、スタッフの意識啓発の目的には合致していると考えている。これまで5回、職員の20%がこの研修会を受講している。職種別に参加者の偏りがある点が問題であるが、最近では診療部の医師の参加もあり良い傾向と考えている。配布資料などを標準化して毎回同じ流れで行われるようにし、運営スタッフの負担軽減のため参加者の中から次回の運営スタッフを選んでお願いしている。私たちの活動を御紹介したい。